

南十字星

大阪大学外国語学部
(旧大阪外国語大学)
インドネシア語同窓会

2015年秋 第21号

発行 南十字星会

連絡先 大阪府池田市五月丘 2-5-113-402

電話 Fax 072-753-1693

Email: tani.kazuya.g@gmail.com

「南」に導かれて

安田 和彦 (1989卒)



大阪外国語大学に入学し、インドネシア語を学び始めてから 32 回目、ご縁あってここ京都産業大学でインドネシア語教員として勤め始めて 12 回目の夏を迎えました。

今、この間の日々を振り返り、また、大学は異なっても、毎年毎日、かつての自分と同じく、新しい言葉としてインドネシア語を学ぶ学生たちと接して思うこと、それは、「南」に導かれ、ここまで来ることができたという実感です。

高校 2 年生から 3 年生にかけて、大学進学を具体的に考え出した頃です。6 学年上で拓殖大学の英米語学科に進みながら、大学でインドネシア語を学び、それがきっかけで外務省の在外公館派遣員としてジャカルタの日本大使館に勤務していたという先輩の話を聞く機会がありました。その時、インドネシア語は学んだらすぐ生かせる言語だ、ということを知ったのです。中学、高校とそれなりに英語が得意だったし、大学も語学系がいいかなという漠然とした思いが、大学でインドネシア語を学び、留学もしたい、学んだ語学を生かす道に進みたいという確たる希望に変わりました。

あの時、なぜ、すぐにインドネシア語を学ぼうと決めることができたのか、よくは思い出せません。ただ、青森という雪深い北国に生まれ育ち、心のどこかに南への憧れがあったのでしょうか。

1984 年に外大に入学した時、主任は松尾大先生。森村蕃先生はインドネシア出張

中で、松野明久先生は 2 年目、アイプ・ロシディ先生は入学式で記念講演をされました。そして、松浦健二先生を始め、多くの先生方も非常勤として来られていました。

中学、高校とはすべてが違う、大阪での大学生活。四月病も五月病もありましたし、当時の学生が一通り通る道は、ほとんど通ってきたように思います。

何年生の頃か、帰省中に親戚から父親の話を聞く機会がありました。父は地元で中学校の教員をしていましたが、若い頃、海外の日本人学校に赴任する話があったのだそうです。詳しい経緯はわかりませんでした。とにかく、行き先はインドネシアだったはずで、ただ、当時の様々な状況を踏まえて、赴任を断念したのだと教えられました。

そして、大学生になって初めて、父の話をしてくれた親戚も含め、戦時中にインドネシアに行っていた経験を持つ人が、青森の田舎の身近に何人かいることも分かりました。

父からは、16 年前に亡くなるまで、インドネシアの話を直接聞いたことはなかったように思います。しかし、インドネシアにかつての激戦地を訪ねた時に、父の若い頃の思いも、身近な人たちの戦争の記憶も、すべてがインドネシアへの、南方への導きだったと思います。起こされるのです。



東ヌサ・トゥンガラ州、小スンダ列島の東端のアロール島

留学を経て5年で学部を卒業。その後2年で大学院を修了し、いくつかの大学で非常勤講師をしていた1995年の夏、松尾先生からお電話をいただきました。それが、前任校の沖縄県名護市の名桜大学とのご縁の始まりでした。大学院を出て、非常勤講師を続けている身には、専任講師のお話は本当にありがたいものでした。

その年の秋に、初めて沖縄を訪れ、名護の街並みを見た時に、ここはインドネシアだと本当に思いましたし、翌1996年に、開学3年目の名桜大学に赴任し、それまで大阪にいた時には遠かったインドネシアを、目の前に広がるこの青い海を越えたすぐ先にあると感じるようになりました。



赴任して間もない頃、大先輩の教授から「先生、今日の1時から1時間の会議は何時からでしたかね」と言われたこと、「マタハリってインドネシア語にもあるんですね」と自己紹介をする度に言われたこと、すべてがなつかしく思い出されます。

そして、沖縄は、日本の言語、文化に見られる南からの影響について考える機会を与えてくれました。

沖縄では南のことを「ハイ、ハエ」と言いますが、その「ハイ、ハエ」の語源は、インドネシア語の起源でもあるオーストロネシア祖語で「えい」を意味する“*paRi”（古代の言語での、おおよそのパリという音を表す）にさかのぼることができ、その“*paRi”は、インドネシア語では“bintang pari”の“pari”です。

現在のインドネシア民族のほぼすべてにとって直接の祖先にあたる人々の中に、紀元前2000年頃（縄文後期）にニューギニア島北部を通過してミクロネシア西部を北上し、琉球列島へ到来した人々もいました。

その結果、古代琉球語にオーストロネシア祖語から基礎的、文化的な語彙が数多くもたらされ、その中の1つ“*paRi”は、インドネシア語、インドネシアの諸言語で「方角、もしくは夏になると風が吹いてくる方角を表すえいの形の星、すなわち南十字星」等に意味が変化し、琉球語に取り入れられ南を意味する「ハイ、ハエ」となったのです。



この説は、外大にも来られていた崎山理先生のご著書に詳しく書かれているのですが、私はそれを一読して信じました。言語学を専門とする研究者としては、信じる以前に学問的に検証する態度を持つべきなのかもしれませんが、名護に暮らしながら、直感として間違いなく感じました。

その後、直感に導かれるままにインドネシアを訪れ、南十字星を見ました。特に、2002年夏にアロールで見た南十字星の輝きは忘れられません。赤道直下、夕日が水平線に沈むと、あっという間に漆黒の闇が広がります。その中に、南十字星が強い光を放って現れます。あの輝きに導かれて、私達の祖先は海を渡ったのだ。その思いは、さそり座がどれかわからなくなる程の光に溢れる天の川が流れる満天の星空に、とけて往きました。

8年間お世話になった名桜大学を離れ、京都産業大学に移って12年目になりました。京都産業大学インドネシア語の初代主任教授は松浦健二先生、その後を継いだ松岡邦夫先生、粕谷俊樹先生も、外大の先輩であり、在学中には直接教えていただきました。そこで教壇



に立つことができるのは、本当に幸せなことですし、外大の卒業生として誇りを持って諸先輩の名を汚さないよう務めていかなければなりません。

インドネシアは改革の時代を経て、再びの成長軌道に乗っています。昨年には日本企業が次に進出したい国の1位になり、インドネシアへの社会的関心も高まっています。大学のオープンキャンパス等では、高校生（とそこご両親）から、「インドネシア語はどんな言葉ですか。インドネシア語の卒業生の就職先はどうですか」という質問だけでなく、「そもそも先生は、なぜ、インドネシア語を学んだのですか」と聞かれる機会も増えてきました。

今、インドネシア語を学んでいる人たち、これからインドネシア語を学ぶ人たちが、インドネシアに導かれ、インドネシアという新しい世界への扉を開いてほしいと願っています。

【写真説明】㊤パプア州ジャヤブラ近郊ゲニム村の戦没者慰霊碑 ㊦北スラウェシ州ビトゥン市沖縄県人慰霊碑 ㊧パプア州北部、ビアク島の「戦没日本人之碑」

ジャカルタ発



渋滞とランとSNS

沢地 一夫 (1990 卒)



私は 1990 年に大学卒業後、コンシューマーエレクトロニクスの会社に入り、インドネシア、台湾、米国マイアミ、インドネシア、と企業人としては 2 度インドネシアに駐在しています。2 度目のインドネシア駐在の後、2014 年に最初の会社を退職し、そのままインドネシアに在住しています。現在は別のコンシューマーエレクトロニクスの会社でインドネシアの市場を開拓するマーケティングの仕事をしています。在インドネシアは、1997 年～98 年と 2006 年から現在までの合計で約 11 年になります。

今年は初めて Lebaran (Hari Raya) の大型連休全てをジャカルタで過ごしました。この連休には、ジャカルタ在住の外国人に限らず、インドネシア人も旅行をするか帰省のため、いわゆる民族大移動が起こります。今回は、なかなか経験できない空っぽのジャカルタを体験してみることにしました。ジャカルタは世界でも有数の「渋滞都市」ですが、Lebaran 連休期間中は市内に溢れていた自動車やバイクがいきになくなります(写真⑤スタイル通りの平常時との比較)。初めて渋滞のない快適なジャカルタを経験したら、そのギャップに驚かれると思います。

インドネシアでは、この 10 年位の間に不動産の建設ラッシュで街の景観も変化。海外から流れ込むモノやインターネット、スマホの普及でライフスタイルも様変わりしましたが、このジャカルタの渋滞だけは変わらず、むしろ以前よりもひどくなったと思います。

私は自称「ランナー」で、アマチュアランナーとして時々ランイベントに参加しています。もともと 10 代 20 代の頃はランニングが好きな方ではなかったのですが、10 年位前に 3 ㎞ほどジョギングをする機会があり、その際に体の衰えに気づき、体力強化のためにランニングを始めたのがきっかけです。インドネシアで、更にランニングが好きになり、自分の身体能力が上がっていることが殊のほかうれしく、毎週のように開催されるランイベントには、気軽に参加。普段渋滞する道路が、その時だけランナーのために開放され、ビルを横目に走る開放感はもうたまりません。

またインドネシアでポピュラーな Facebook, Path, Instagram などの SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)もランニングをするためのモチベーションを後押ししており、これと渋滞とランの組み合わせ



はおもしろく、いろんな形でビジネスや個人のライフスタイルに入り込んできています。インドネシアのランイベントでは、私のようにランニングそのものを楽しんで参加する人、記録や賞金獲得にチャレンジする人もおります。一方で、健康志向・スポーツ好き・スポーツファッションやコスプレなど、自分が発信したい情報を SNS に載せるためにランイベントに参加するといったタイプもよく見られます。

ここ数カ月前に始まった「GO-JEK」というサービス会社があります。ネーミングが「OJEK」(バイクタクシー)をもじっているのがまた親しみを感じるのですが、この「GO-JEK」というのが、渋滞とランと SNS の組み合わせの中で始まった新ビジネスモデル。これは、通常



のバイクタクシーとして人やモノを運ぶのはもちろん、買い物代行のサービスもやってくれます。

例えば、Otak-Otak(魚のすり身を葉っぱに包んで焼いた食べ物)のおいしい店があるけど、場所がわからないし、行くのも面倒という時、スマホで簡単に GO-JEK で予約すると代わりに買って家まで届けてくれます。

人やモノを運んだり、買い物代行自体はそれほど特別なサービスではありませんが、これまでの OJEK とは異なる、クリーンなイメージで街を走り、渋滞の影響を受けないサービスとして SNS をベースに売り出しているのが、多くの人に受け入れられているポイント。最近感心させられたビジネスモデルです。

日々の移動の際にこのジャカルタの渋滞はいつになったら解消されるのかと思いつつ、車の中ではスマホで SNS をチェックするのが習慣になり、インドネシア人のウェットな投稿やゴシップ話に時にはクスリとし、こんなことまで投稿するのかと驚いたり、新たな発見もあります。車で渋滞のときは SNS→仕事→また渋滞を繰り返し、週末にはジャカルタの街をスマホ片手にランをして、気分爽快になりたいと思います。



キャンパス便り

言語文化研究科 准教授 菅原 由美
(外国語学部インドネシア語専攻担当教員)

平成 27 年度新入生入学

4月2日に入学式が執り行われ、13名の新入生が入ってきました(インドネシア語専攻12名、日本語専攻1名)。今年はなんと男性が7名、女性が6名で、男子が女子を上回りました。何年ぶりでしょうか。数がちょうどよかったので、前期は男女ペアでインドネシア語の練習をしてもらいました。

新大阪総領事が訪問

4月6日に新大阪総領事、ウィスヌ・エディ・プラティグニョ(Wisnu Edi Pratigny)氏が領事、副領事、秘書官とともに大阪大学を訪問されました。まず、箕面キャンパスでインドネシア語専攻の学生との懇談会、続いて、外国語学部学部長と今後の交流等についてお話をされ、その後吹田キャンパスに移動され、平野総長とも会談されました。

サザンクロス講演会

4月17日に、インドネシア科学院(LIPI) 研究員で、この時、京都大学東南アジア研究所招へい研究員であったアスフィ・ワルマン・アダム(Asvi Warman Adam)先生に「1965: Tahun Yang Tidak Pernah Berakhir(終わることのない1965年)」というタイトルで、9.30事件に関する講演をしていただきました。9.30事件から50年という節目を迎え、非常に興味深いお話を聞くことができました。この後、ちょうど、映画Act of Killingの続編、Look of Silenceが日本でも上映されました。

共同研究室活動 インドネシア料理会



今年は6月18日に、アミ・アミナ・ムティア(Ami Aminah Meutia)先生に2年生がインドネシア料理を習いました。今回のメニューは、ソト・バンドン、ナシ・ブンブ、トゥールル・クニン、アヤム・スモール、ピサン・ゴレン、テンペでした。例年よりも品数が多く、しかも料理中はインドネシア語しか話してはいけないということだったそうです。作り終え



夏祭り

7月4日土曜日、例年通り箕面キャンパスで夏祭りが開催されました。メニューが定番化していますが、今年も2年生がピサン・ゴレンを作りました。レシピは昨年と違ったようです。今年は皆で作った、裏にガルーダのイラスト付きの真っ赤なTシャツを着て、サフィトリ先生と一緒に頑張っていました。暑い中、ご苦労様でした。



インドネシア人留学生との交流会

今年もインドネシア留学生協会大阪・奈良支部PPI-ON(Persatuan Pelajar Indonesia-Osaka/Nara)との交流会が始まりました。

まず、6月7日に、豊中国際交流会館で、ちらし寿司を作って、新入生歓迎会を開きました。それから、断食中の7月20日に、ブカ・プアサの会に参加させていただきました。10月10日(土)には箕面グリーンホールで「インドネシア伝統芸術公演-ハヌマン 修行の旅-」をPPI-ONと外国語学部との共催で行います。皆様、是非見にいらしてください。

た後は、2年生は疲れ切っていました。でも、苦勞の甲斐あって、とてもおいしかったです。

《教員の活動・研究から》

Tradisi Cap Go Meh di Kalimantan Barat

特任准教授 Savitri ELIAS

Keragaman budaya dari tiap suku bangsa menjadi ciri khas Negara Kesatuan Republik Indonesia. Walaupun beragam namun tetap satu, itulah cermin dari Bhinneka Tunggal Ika.

Objek penelitian penulis terkait dengan tradisi budaya Tionghoa di Indonesia. Kalimantan Barat merupakan salah satu provinsi di Indonesia yang kaya dengan budaya daerah, baik dari suku Melayu, Dayak, maupun Tionghoa. Provinsi ini dipilih sebagai lokasi penelitian, karena di provinsi tersebut kerjasama antarsuku terlihat jelas pada kegiatan yang berhubungan dengan budaya (Contoh; pada arak-arakan naga). Penelitian lapangan dilakukan dengan merekam dan melakukan wawancara dengan narasumber.

Berpijak pada peribahasa tak kenal maka tak sayang, penulis ingin menggambarkan tradisi Cap Go Meh, yaitu salah satu tradisi budaya Tionghoa yang menarik perhatian masyarakat Kalimantan Barat, wisatawan domestik, dan wisatawan manca negara.

Tulisan ini merupakan uraian dari sebagian hasil wawancara penulis dengan tokoh masyarakat dan pengamat budaya, Bapak F.X. Asali yang aktif melestarikan tradisi budaya Tionghoa.

Kata Cap Go Meh berasal dari kata dialek Hokkien / Tio Ciu: Cap go 'lima belas', Meh 'malam'.

Berarti malam ke limabelas setelah perayaan Tahun Baru Imlek. Di Cina perayaan ini disebut Yuan Shiau Ciek (元宵節) 'Festival Malam Bulan Satu.'



ポンティアナクで、中国伝統文化の保存活動に取り組んでいる Asali 氏から話を聞く筆者 ⊕ =2014 年 9 月



Dari naskah kuno dijelaskan ada dua versi tentang Cap Go Meh:

- 1) 'Yuan Shiau Ciek' adalah festival untuk menandakan berakhirnya perayaan tahun baru. Festival ini dilakukan sejak Dinasti Xie Han (206 SM – 24 M)
- 2) Pada zaman Dinasti Tung Zhou (770 SM – 256 M), para petani memasang lampion-lampion untuk mengusir hama dan menakut-nakuti binatang perusak tanaman pada tanggal 15 malam bulan pertama. Petani-petani itu juga melihat perubahan warna api dalam lampion, karena mereka percaya bahwa dari perubahan warna api dapat diramalkan cuaca yang akan terjadi. Apakah sepanjang tahun akan terjadi kemarau panjang atau lebih banyak curah hujan.

Tradisi Cap Go Meh di Kalimantan Barat diisi dengan arak-arakan naga, permainan Barongsai 'tarian singa' dan atraksi kemampuan perdukunan Cina yang disebut Lauya (老爺) atau Tatung=写真. Maksud dari arak-arakan tersebut adalah untuk menolak bala dan membuat suasana menjadi meriah.

Demikianlah potret dari salah satu tradisi Tionghoa di Kalimantan Barat yang patut dikenal sebagai budaya daerah Indonesia.



ラマダンとレバラン

中村 英樹 (1987卒)

丸4年の本社勤務を経て2014年11月に3度目のインドネシア赴任となり、ジャカルタに戻ってきた。ここ数年、政治・経済面で大きく変革・発展を遂げた結果、社会も多少は変化しているのでは？と思いつつの赴任であった。ここでは、ジャカルタにおけるラマダン(断食月、2015年は6月18日～7月16日)とレバラン(断食明けの大祭)について触れてみたい。

ラマダン後半に、会社の従業員向けにラマダンの習慣についてのアンケート(有効回答総数:105)を行った。朝4:30前後にプアサ(断食)が始まるため、3:00～4:00の間に起床(3:30が一番多かった)する。最近では外でサフル(断食前の食事)を取る、いわゆる『サフル・オン・ザ・ロード』が若者たちの間では流行と聞く。夜通しバイクで群れをなして徘徊し、時間が近づくとき“サフル!サフル!”と住民に呼びかけ、最後は仲間たちと路上でサフルを取る。騒音迷惑でもあり危険行為の可能性もあるため社会問題となっているので、行政側もサフルは自宅で取るように喚起している。

サフルの時間、テレビでは毎朝レポーターが著名人(政治家や芸能人など)の自宅を訪問、家族とともにサフルを取っているところへ参加し、家族と一緒にサフルの大切さを伝えようとしていた。

アンケート回答者の7割以上が自宅でサフルを調理し食すとあり、しっかり米食をおかず(揚げ物が多い)とともに取り、野菜や果物、牛乳やアイスクリームと、まさにフルラインナップの食事。食後の活動では、約4割が睡眠を含めた休息をしている。もちろん、お祈りやコーラン音読なども行いつつ、その後すぐに職場に向かう者も2割弱いた。

ラマダン中盤の金曜日夕方に会社でブカ・プアサ・ブルサマ(合同断食明け)の食事会があったため、私はその週の5営業日に断食(最初の3日は半日断食、後の2日は終日断食)を実行してみた。

確かに朝3時過ぎに起床し食事を取るのはつらいが、結局その後、会社へ向かうまで



イスラム新年の挨拶をする筆者

は再び寝てしまう。頭がすっきりしない中での出社。これは身体にいいのだろうか? プアサ中は、腹を立てず、怒りを抑え、争いごとを避けるものだと聞いていたが、確かに精神状態が“無”に近い感覚になり、怒る気力も沸かない。大変下劣な話で恐縮だが、生活が不規則になり、それまで朝は快便であったものが出なくなってしまった。

会社の施設関係に関する意見について、アンケート回答では、エアコンが効きすぎるので寒いとの声が圧倒的に多く、普段は着用しないジャケットやスウェットを重ね着している職員が多かった。また中には体調を崩し風邪を引く者も。確かに空腹の時間が長いため、体温も低下しやすい。また睡眠不足に陥りやすい生活サイクルと言えるだろう。昼の休憩は、当社では30分としている(プアサ以外の普段は食事の時間を考慮し60分)。仮眠を取るのかと思いきや、圧倒的に(7割強)お祈りと回答するものが多かった。

プアサ期間中は毎日昼の時間にチェラマ(イスラム導師による講義)を開催して欲しいという要望も多かった。夕方、ブカ・プアサ(断食明けの水取り)以降、テレビでは子供向けの番組(漫画やバラエティショーなど)が多かったが、この時期は子供たちにもイスラムの教えを学ぶ時間に充てるよう、政府も推奨している。

とある番組では、複数の親子が参加して車座に座り、導師が教えを判りやすく諭したり、質問したりしていた。また飲料製品などのコマercial放映でも、僅かの時間内で親が子にイスラムについて諭すシーンを盛り込んだものも多く見られる。前述の当社で行ったブカ・プアサ・ブルサマの食事会でも、その前に50分のチェラマ(写真②)を開催した。多くの者が熱心に聞き入っていた。

当社はプアサ期間中、8時始業の16:30終業（普段は8:30始業の17:30終業）としているが、ブカ・プアサ（18:00の少々前）をどこで行うか？ 5割強が、帰宅途上で取ると回答。退社ないし退社前に、会社の近くで飲み物やスナックを買っての帰宅となる。路上でも俄仕立ての直売所で甘い飲み物や揚げ物が売られる。出店許可や規制など特になく、誰もが副業のようにやっている様子だ。この路上の直売所がさらに渋滞を悪化させる。

公務員は午後3時に終業、民間会社でも多くは午後4時頃に終業。プアサ以外の普段は、午後6時以降に渋滞のピークを迎えるが、この時期は午後3時～午後6時が大渋滞となる。自ずと、帰宅途上のブカ・プアサとなる訳である。（㊦金曜礼拝に向かう人たち）



最近では近郊鉄道が整備され、運行本数も増えた。鉄道利用者が急激に増えているものの、さらに車も増えている。自宅にたどり着くだけでも大仕事である。逆に、残業をし、会社内ないし会社近辺でブカ・プアサを行い、その後帰宅の途につく（午後6時以降）ものもある。普段なら渋滞がひどくなっていくこの時間帯は、驚くほどにスムーズであり、この方がいいのかもしれない。

タクジル（断食明けの食事）については、自宅で調理して食する者と、飲食物を購入して自宅で食する者とが、ほぼ半分半分であった。サフル同様、しっかり米食をおかずとともに取り、野菜や果物、ジュースやコーヒーとフルラインナップである。プアサでない時の方が、朝夕とも食する量が少ないとの回答が多かった。中には夜2回食事を取るものもいた（5名）。

就寝については午後10時頃が一番多く（5割弱）、続いて午後11時頃（4割弱）と遅い、逆に午後9時頃に寝てしまうものが約1割、ごく少数が午後12時以降まで起きていたとの回答であった。折角の飲み食いできる時間なので、早く寝るのがもったいないという意見が多かった。

ラマダンが終了して、7月17日（金）にレバランを迎

えた訳であるが、16日（木）の夕方 MUI（インドネシア・イスラム導師・評議会）が宗教大臣とともに協議を重ね、月の満ち欠け（インドネシア標準地としてプラブハン・ラトゥージャカルタから南に下りたインド洋側の町一での観測）を確認した上で、翌日がレバラン入りであるとの正式発表があった。最後のプアサを終えたその夜はお祭り騒ぎ。太鼓を打ち鳴らし、花火があちこちで打ち上げられた。ただ、メガワティ政権やユドヨノ政権時の頃に比べ花火がおとなしくなったように思う。何人かに尋ねてみると、やはり足許不景気であるからではないか？ という回答と、以前はそのさらに前のスハルト政権下で禁じられていたことからの反動が大きかっただけで、今の政権となってはさほど規制や圧力を感じなくなってきたからではないか？ という回答に二分した。

17日の朝7時頃にはイスラム新年のお祈りが行われた。通常大統領はジャカルタのイスティクラル寺院の合同礼拝に参加するが、ジョコウィ大統領はソフィアン経済調整大臣とともに、アチェの寺院での合同礼拝に参加した。インドネシアはジャカルタだけではない、幾多の地方を抱える多様性の豊かな国だ。これから毎年、新年のお祈りは地方で行うと大統領は述べている。

レバラン休暇に行う海外旅行は前年比減少、ただし国内旅行は微増となった。ムディック（帰省）の際における大渋滞は毎年の名物であったが、チパリ新高速道（チカンベック＝チレボン間）が開通してパントウラ（ジャワ北岸道）と分散されたこと、また渋滞を避けて往復とも時期をずらす人達が増えたこと、他の手段（航空やなかでも鉄道）利用が増えたこともあって、若干緩和した様子。

ジャカルタ市内では閑散としているものの、最近では商業モールもラマダン初日から開店しており、とりわけ今年5月末に開店したイオンモールでは溢れんばかりの人だかりとなった（写真㊦）。アンチョール公園、タマンミニ公園、ブンチャック方面、ラグナン動物園など定番スポットは、レバラン休暇中どこも大混雑の状態であった。そして伝統的なレバラン食に誰もが2日目あたりから飽き始め、行楽先で外食を取る文化が広がってきたように思った。



政治の安定の中での経済発展に伴い、弊害として都市交通における渋滞が悪化。社会人生活スタイルも変化している。サフルやブカ・プアサを自宅外で取る者、また取らざるを得ない者など、習慣が多様化している。それがゆえに、少なくともこのラマダンの時期にだけ

は、今一度イスラム教義について考えてみようという空気が意図的に強められていることを感じた。

寄稿

Apa & siapa

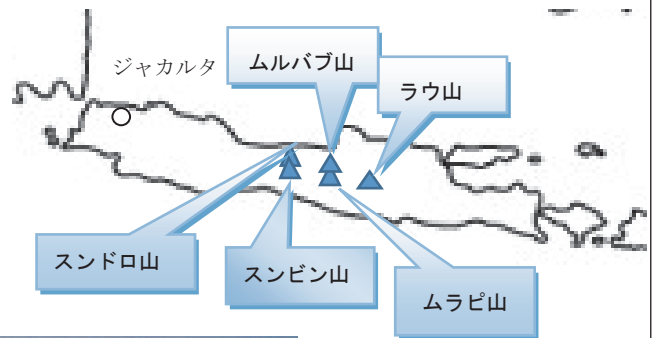
中部ジャワの 懐かしい山々

松木 優 (1962 卒)

ジャカルタ勤務を終え帰国してから8年後の1991年、グループ会社が中部ジャワにスポーツ衣料縫製の合弁会社を設立することになり赴任した。場所は古都ソロ市の西方約20^{km}のボヨラリ市。人口は5万人ほどで、県庁所在地でもある。そして、西方にはジャワの名峰と言われるムラピ山(2,925^m)とムルバブ山(3,125^m)が聳えている。

山好きの私は1994年8月、まずムラピ山に挑戦することにした。同行者は工場の若い運転手君。ムラピには何度か登っているとのこと。セロという小さな町からのピストン夜行登山である。懐中電灯を頼りに黙々と登る。途中の岩陰で1時間あまり仮眠を取り時間調整、山頂でしっかりとご来光を拝めた。太陽はソロ市の東方、ラウ山の左から神々しく昇った。展望は抜群。すぐ北隣にはムルバブ山、その少し西奥にスンビン山、左後ろに端正な山容のスンドロ山、と後年登ることになる山々がどっしりと構えていた。さらに西方にやや小さく頭が見えているのは中部ジャワの最高峰スラムット山(3,492^m)だ。深い火口は南西方向に大きく口を開けている。

ムラピ山頂の象徴といわれるガルーダ岩が突っ立っている(岩は2006年の大噴火でなくなってしまった)。若者たちが大勢集まっている。やがて、国旗を掲げ国歌を斉唱し始めた。自分も一緒に歌っていると涙が出そうになった。この日は8月17日、独立記念日だったのだ。この儀式

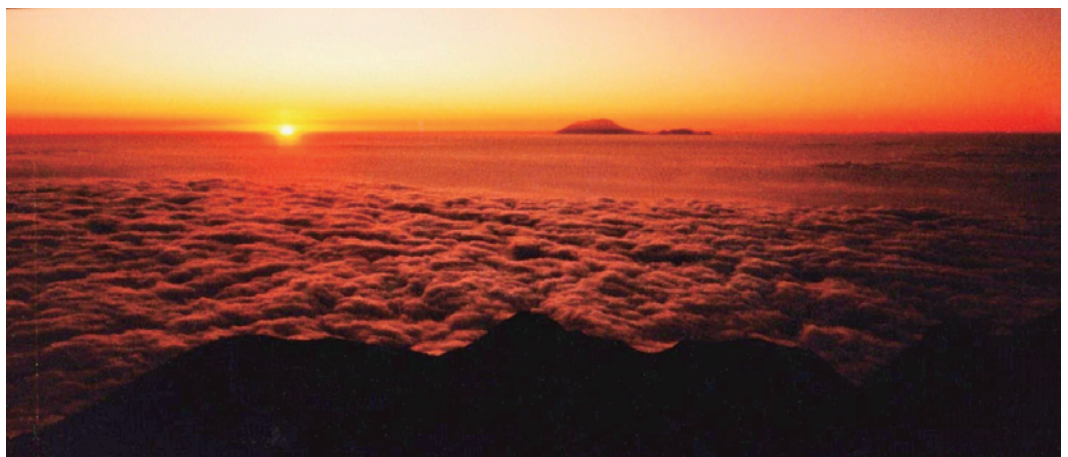


は毎年やっているとのことだった。

(写真④ムラピ山頂ガルーダ岩で⑤山頂からのご来光、右の山はラウ山=1994年8月)

1996年5月、ソロの東方、東・中部ジャワの州境にあるラウ山(3,265^m)に単独で登った。数組の下山グループに会っただけで山頂近くのピーク着。夕陽が西の彼方ムラピ山、ムルバブ山の方へゆっくりと沈む。山頂は草や低い灌木が生えており火口はない。若者が20名ほど集まっていた。スラバヤの国立エルランガ大学の山岳部だそう。超質素

な山小屋は彼らに占領されていたが、スペースを空けてくれたので、ゆっくり寝ることが出来た。ここでのご来光は覚えていない。東南の彼方にジャワの最高峰スメル山(3,676^m、日本占領時代は皇“すめら”山と呼ばれた)が15~20分置きに间歇噴火するのがきれいに見えた。学生たちとは、今度はスメル山で会いましょうと、お互い外交辞令で別れた。





㊤工場から西方を見る。左がムラピ山、右がムルバブ山
=1992年ごろ ㊦ラウ山頂で高校生たちと=10年7月
㊧ムルバブ山頂で、4人組と=03年9月



その後、もと顧客だった会社のワイシャツ縫製会社の設立を手伝うことになり、2002年まで滞在。結局、ボヨラリには10年ぐらい滞在したのだからその間登った山は上記2山だけに終わってしまったのが心残り、また挑戦するぞという気持ちで帰国した。

帰国した翌年の2003年9月、ムラピ山のお隣のムルバブ山に挑戦することになった。山頂が爆発で飛んでしまったようにギザギザになっている大きな山である。時々山の話をしてきたワイシャツ縫製工場の若者に連絡を取ると、OK登りましょうということになり、4人の若者との夜行登山である。展望はムラピ山頂と同様抜群である。この若者4人とは2006年9月、スンビン山(3,371 ㊦)へも登っている。

2009年6月、スンドロ山(3,151 ㊦)に挑戦。今回は、帰国後入会した山の会の女性2人と、50年来の旧友Y君(英語62卒)と一緒にいる。同行はいつもの4人組のうちのリーダー格の1人でこのときは会社労組の委員長になっていた。彼もこの山は初めてのことで、経験者の友人を連れてきてくれた。

スンドロ山はすっかりしたミニ富士山のような山容で、火口は深い小さくお鉢周りも出来た。北には大都市スマラン市に近いウンガラン山(2,050 ㊦)が、また、北西にはヒンドゥ遺跡で有名なディエン高原が

見え、東南には2006年に登ったスンビン山が間近に構えている。展望を満喫して往路を下った。麓に近くなると立派に成長している煙草畑があちこちに見られた。この光景は今まで登ったどの山も同じである。

2010年7月、ソロ市の東方にあるラウ山に登った。1996年に単独で登った山である。仲間はスンドロ山の時と同様山の会の女性2人とY君。そして4人組からは3人。夕方前からゆっくり登り途中の小屋で仮眠。朝方、山頂へ着いて驚いた。あの超質素な小屋はなくなり辺りは激変、立派な山頂碑まで建てられ大勢の高校生が賑やかにひしめいていた。天候がすぐれず展望はなかった。あの、スメル山の間歇噴火を仲間に見せたかったのだが。

私の中部ジャワの山登りはこれで終わった。最高峰のスラメット山は遠く離れており、交通の便も悪いのでついに登る機会を失ったのは心残りではある。

1 昨年、ボヨラリを訪ねた。ジョクジャカルタの上空から、ある

いはホテルから、懐かしい山々を見ることが出来た。4人組も運転手君もそれぞれ中年に差し掛かり貫禄がつき、もう山はムリですよと笑っていた。しかし、長い間、職場を変わずに元気に働いてくれている姿を見て嬉しかった。



スンビン山頂で。後方はスンドロ山=06年9月

寄稿

Apa & siapa

インドネシア総合研究所 に勤めはじめて

橋本 明音 (2012 卒)

「橋本さんは、なぜ今の会社で働いているの？」知人に出会うとよく尋ねられる質問です。

2012年にインドネシア語科を卒業。新卒で入社した会社は約2年の勤務を経て退社し、昨年からはインドネシア総合研究所という会社で勤務をしています。業務内容は主に日系企業がインドネシア進出するサポートです。大学時代に強く興味をもったインドネシアに携わる仕事に、ようやく就くことができました。現地出張も定期的であり、2~3カ月に1回はジャカルタを訪れるような生活を送っております。

社長のアルビー氏は偶然にも、来日して最初の1年間をかつての大阪外国語大学に在籍しておりました。先日、箕面キャンパス移転計画のニュースを知り、社長とともにキャンパスの風景を懐かしがったものです。

日本のオフィスは全員で8名勤務しており、うち3名がインドネシア人という環境のため、日々インドネシア語が飛び交っています。さらに、現地オフィスには現地人しかいないので、やり取りはすべてインドネシア語。卒業後約2年間のブランクで徐々に忘れつつあった言語の勉強になっております。

インドネシアでインドネシア人とお仕事をする大変さは、想像通りというか、それ以上でした。

まず、インドネシアのJam Karet(ゴム時間)です。日本人のように分単位で時間を守ることはありません。約束や提出の時間が過ぎることはしばしば(約束についてはジャカルタ市内は渋滞がひどいので仕方ない部分もあるのですが…)。工程が遅れることも再々です。通常なら3カ月で完了する工程が、平気で倍以上かかったりすることもありました。インドネシアの人はきちんと報告・連絡・相談をする“習慣”がないようで、依頼をしていた作業の締め切り当日に「やっぱり提出できません」という連絡が、過去にはありました。

最近では、インドネシア案件と同時に並行で、フィリピンのビジネスもさせていただくことになりました。同じ東南アジアの国なのに、やはり色んなことが異なっ

ジャカルタでアルビー社長の誕生日会。現地スタッフ、友人らと一緒に。前列中央の白い服姿が筆者



ており、毎日新たな発見があって面白く感じています。

インドネシアは法規制が十分に整っているとは言えないのではないのでしょうか。対して、法規制という点ではフィリピンの方が上回っているようで、インドネシアと比較すると、わかりやすくハードルが低いと感じます。

また、私の印象なのですが、インドネシアではバンドン工科大学やインドネシア大学などのトップ大学を卒業していても英語ができない人はざらにいますが、フィリピンでは母語のように英語ができる人がとても多く、基本的には英語でコミュニケーション可能です。

マニラの渋滞もかなりひどいとは聞いていました。しかし、実際訪問してみるとジャカルタほどではありません。インドネシアで道路などの交通インフラの整備が大きな緊急の課題であることが、私なりに理解できました。

東南アジア全体の状態を把握しているわけではありませんので一概には言えませんが、一度インド

ネシアのあの“ごちゃっ”とした状況に慣れてしまうと、東南アジアの他の国への進出のハードルは少し下がるような気がします。強気の攻めで、チャレンジしていける気持ちになります。

今回フィリピンの案件を通じて、そんなインドネシアがなぜかとても恋しくなる時があります。インドネシアの持つ、不思議な魅力でもあるのでしょうか。

現地人との間で何か問題が起こった時などは対応が大変ではあります。でも、その時は現地の方の考え方や働き方について、またひとつ勉強の機会を得られたと思っています。スムーズにいかず辛い時もありますが、その大変さにやりがいを感じます。今後もいろいろな経験を積み、どんな“発見”をさせてもらえるのか楽しみにしています。



在日インドネシア大使館でのイベントで弦楽器ササンドウの奏者と

ご報告

会長 宮崎 衛夫 (1965 卒)

本年4月入学のインドネシア語専攻生は、男性7名・女性5名の計12名でした。2007年に阪大と統合後は毎年1~2名の男子しか入らなかったことを思うと、男子の大躍進であります。やはり男女比があまりにもアンバランスなのは不自然で、我がインドネシア語同窓会としても喜ぶべき傾向でしょう。ちなみに外国語学部全体では、624名の新入生のうち男子は233名で4割弱まで増えております。これも統合前の男子比率3割弱から徐々に増えていく傾向ですが、いずれにせよ男女問わず、世界に羽ばたき活躍する人材に育ててもらいたいものです。

現在の外国語学部の本拠となっている箕面キャンパスが、移転することになりました。新校舎は、地下鉄御堂筋線からつながる北大阪急行（現在千里中央駅が終点）が延長されて、その一駅目になる箕面船場駅（仮称）に、箕面市が新たに開発する一角に移る予定です。箕面市と大学側との最終合意書は2016年4月に締結される予定ですが、順調に進めば大阪外大の創立100周年にあたる2021年の4月に移転します。これにより高槻→上本町8丁目→箕面と移ってきた学び舎に新たな歴史が加わるこ

とになります。

懸案のインドネシア語専攻生の「定員増強問題」ですが、その後も一部の先輩方の支援も得て、大学当局、関係各位に要請を続けています。一朝一夕では成し得ない難題であることが日増しに分かってきましたが、「若干名の増員を検討している」と少しだけ光がさしてきたかと思われる情報も得ております。現在の定員10名の倍増を懇願している者としてはこれで満足すべくもないので、引き続き粘り強く働きかけを続けいく所存です。



「南十字星会」会報は第21号となりました。これまで編集長の岩谷英志さん(64年卒)には、大変ご苦勞をお掛けしてきました。今後は指導を得ながら、新たに結成した若手幹事を中心とする編集委員会メンバーで会報を担当していくことにしました。

消息

ひとこと(敬称略)

大谷昭三 (50 卒) = 北海道小樽市

2013年に設立された咲耶会北海道支部に入会。物欲なし。願いは健康長寿のみ。

服部英樹 (56 卒) = 三重県四日市市

今年は南十字星会総会がない年なので、来年の会までは心身ともにガンバリたく思っております。

中村 徹 (58 卒) = 大阪府高槻市

病院通いの合間に囲碁・カラオケにうつつをぬかしています。

山口 寛 (58 卒) = 大阪府枚方市

“継続は力なり”を合言葉に発足した会報誌は早いもので節目の20号を越え、今更ながらに感慨無量です。体調を崩されている編集長のご回復を信じて止みません。

西田達雄 (60 卒) = 東京都調布市

“ASEAN”盟主的インドネシアとの多層的關係強化が求められ、インドネシア語の後輩に幅広い活躍を大いに期待したい。

石川恵二 (62 卒) = 横浜市

永年会報編集に尽力していただきました名編集長、岩谷英志様が難病のため職を辞されることになりました。心からお礼とお見舞いを申し上げます。

小原一浩 (63 卒) = 大阪狭山市

4月26日の統一地方選挙で大阪狭山市議会に2期目の挑戦をしました。幸い第1期は6位当選でしたが、2期目は500票を増やせて2位当選しました。各位のご支援に感謝、感謝です。

岩谷英志(64 卒) = 大阪府池田市

小脳の病気で歩きづらくなってから、デイサービスの世話になり、努めて体を動かしています。多くの人の励ましに感謝しながら、リハビリの日々です。

☆投稿のお願い☆

第22号は2016年4月に刊行する予定です。

投稿をどうぞ。テーマは自由です。

締め切り同2月5日。長さ1ページ1400字程度。

カラー写真数枚を必掲にしています。送稿先は

Eメール m-miyazaki@kobe.zaq.jp (宮崎衛夫)

または tani.kazuya@gmail.com

朝倉俊雄 (67 卒) = 横浜市

毎号懐かしく上本町キャンパス時代を思い出しながら拝読しています。会報編集幹事さん、ご苦勞さんです。

扇谷竹美 (66 卒) = 千葉県佐倉市

ゴルフ、飲み会交流、町内会奉仕、俳句の手習い等々健康のお蔭で忙しそうに駆け回っています。

沖 政夫 (66 卒) = 神戸市

岩谷さんの寄稿文に感銘。元気をもらっています。

沖中弘和 (95 卒) = 奈良県宇陀市

最近久しぶりに、たつぷりと英語にふれる機会があり、なんだかインドネシア語に対しても、ちょっと前向きに考えることができるようになってきました。

亀山理恵子 (96 卒) = 大阪府堺市

いつも会報をお送りいただきありがとうございます。

◆おくやみ申し上げます◆

下記の方々の訃報が届きました

山川昭明(1948 卒) = 神戸市北区 2014年2月

太田邦夫(1956 卒) = 愛知県豊橋市 2010年

加藤 稔(1956 卒) = 東京都杉並区 2014年